

「招く」「売れる」「創造する」ためのキーワード。

盛岡市中ノ橋通の「もりおか啄木・賢治青春館」で開催されていた『盛岡 ぼくらの時代展』が、11月30日閉幕した。約2カ月間の開催期間中、「昭和30年代の懐かしい盛岡」をテーマに演出された会場には予想を上回るたくさんの来場者が訪れ、展示品に見入ったり、当時の喫茶メニューに舌鼓を打ったという。懐古か、それとも郷愁なのか。“レトロ”に注目が集まる時代の潮流を追ってみた。



“経験”より“発見”!

『盛岡 ぼくらの時代展』は、昭和30年代の盛岡の街角でみられたごく普通の風景を思い起こさせてくれた。

ガラスケースにガムやアメ、チョコレートが並んだ駄菓子屋、映画やアニメのヒーローが表紙を飾る雑誌が積まれた本屋、建物の軒下にかかる大きな看板に主役の男優や女優が描かれた映画館…。今はほとんど見られなくなった懐かしい情景が、ロマネスク調の近代洋風館の中で再現され、訪れる人を魅了したのである。

しかし、来場したのは中高齢者ばかりではなかった。若いカップルや女子高生、お父さんに連れられて訪れた小学生も少なくない。それだけ幅広い層の人たちを惹きつけた背景には、直木賞作家の高橋克彦さんがプロデュースしたこともあるのかもしれないが、昭和30年代の盛岡をリアルタイムで知らない年代の人たちにとって、洋風館の中で繰り広げられている世界は、現在とは異なる新しいライフスタイルとして受け取られ、新鮮に映ったのではあるまいか。

そこには懐古や郷愁といった“経験”を拠り所とした感慨ではなく、“発見”によって揺り越される感動への期待があるように思われる。

“瞬発力”より“持続力”!

『盛岡 ぼくらの時代展』は、いわゆる期間限定のイベントであったが、

「昭和」をテーマに地域づくりに取り組んでいるまちがある。大分県豊後高田市である。

豊後高田の中心商店街は、江戸時代から昭和30年代にかけて、国東半島一のにぎやかなまちとして栄えたという。

商店街周辺にはそれ以前に建てられた古い建物が7割も現存していることから、街並みを生かした地域づくりに取り組み始め、「昭和の町」として知られるようになった。

その核となっているのが「昭和ロマン蔵」。昭和10年頃に建てられた農業倉庫を改造し、ブリキやセルロイドのおもちゃ、めんこ、ぬり絵、人形など、かつての駄菓子屋のおもちゃコレクションを数万点公開しているほか、懐かしい三輪自動車なども展示している。

商店街の店先にも“昭和”の面影が漂う。古いタン製の看板が飾られていたり、店先の引き戸を木製に替えたり…。喫茶店では「なつかしい昭和の学校給食」をメニューに出しているところもある。

また、春と秋にはイベントも行われていて、期間中は各商店が店頭で懐かしい品々を展示する「昭和のお宝まちかど博物館」が開催される。

筆者が訪れた11月1日は、毎年恒例の「昭和の町豊後高田街並みめぐり」の初日。各商店の軒先には、明治初期の花嫁道具、蓄音機や白黒

テレビなどの電化製品、映画のポスターや当時人気を呼んだレコード、アイスキャンデーの行商自転車などが並べられていた。

そこで目についたのが、早朝からマップを片手に商店街を歩く地元の人たちである。開店早々店主とあいさつを交わしながら店先に展示された懐かしい品々の説明を聞く姿があった。

観光客目当ての単なるイベントで終わらせるのではなく、地域の人たちの対話と交流の場をつくり、まちをおこす。そこには地域の人と資源に目を向けた“継続”と“発見”によるまちおこしの真髓が感じられる。

“正確さ”より“物語性”!

ところで、豊後高田市の「昭和の町」には名物ボランティアガイドさんがいる。頭にヘッドフォンマイクをつけ、手振り身振りを交えながらユーモアたっぷりに解説をして歩く“おばちゃん”だ。

最近、ドライバー全員にまちの観光情報を身につけさせ、観光ガイド機能を売りにしたタクシー会社が登場し始めているが、単に情報を知らせるだけでは利用者の興味を惹くとはかぎらない。時には逸話を交えたりして笑いを誘うような“話術”も大切ではないか。そこには観光ガイドブックなどで仕入れた事前情報にちょっとした情報をプラスすることで新たな“発見”につなげようという、心遣いがあるのである。(公)